



大すきいっぱい西北の子

～学びづくり、くらしづくり、仲間づくり～

令和6年1月17日
長崎市立西北小学校
文責：校長 江原芳樹
第8号

元旦に起きた能登半島地震では、多くの方が災害に遭い、今も困難な生活を強いられています。3学期の始業式では、全校児童、全職員で黙とうを行い、遠く離れた長崎の地からではありますが、石川県へ想いを届けました。一刻も早い復興を願っています。

さて、年が明け、比較的暖かかった気候も、冬らしいぎゅっと冷えた日が訪れるようになりました。特に、ここ数日の朝は手足が冷たさでしびれるほどです。それでも、周りに目をやると、あちらこちらに水仙が咲き、そこだけ灯がともったように明るく見えます。また、鳥の渡りも見かけるようになり、ようやく訪れた冬ですが、一步一步春へと歩みを早めていることが分かります。

学校においても、3学期は1年のまとめでありながら、次学年への準備期間でもあります。現在の学年で身に付けておきたい力が、どの程度身に付いているのか、次学年に向けて高めておきたい力はどんな力か、一人ひとりが考える機会にしていきたいと思います。

令和6年も、どうぞ西北小学校の教育活動にご協力いただきますよう、よろしくお願い致します。

大谷グローブ

12月26日のtetoruでも配信したように、大谷翔平選手から、西北小学校にもグローブが届きました。グローブは3つです。右利き用の大きめのグローブと小さめのグローブ。そして、左利き用が入っていました。

始業式の日、全校児童に紹介しました。箱からグローブを出すと、みんなの大きな歓声が体育館に響きました。

グローブは3つ、しかも一つひとつサイズや利き手が違うのには、大きな意味があり、それは大谷選手からのメッセージでもあるように感じました。

小学校という場所は、体の大きな高学年もいるし、まだ体が小さい低学年もいる。右利きの人が多いだろうけど、間違いなく左利きの人もいる。いろいろな人がいるのが小学校で、しかもキャッチボールは一人ではできないものだから、いろいろな仲間と野球を楽しんでほしい、そんな願いがこもっているように感じました。

プレゼントされた3つのグローブは、一度各学級に回覧しました。それぞれの学級では、グローブに手を入れ、興奮している子どもたちの様子がありました。普段は野球どころか、キャッチボールもしたことがない子どもが多いのですが、皆、キラキラと目を輝かせています。

今後は、大谷選手のメッセージある「野球しようぜ」ができるよう、子どもたちへ貸し出していこうと考えています。学校へお越しの機会には、ぜひ保護者の皆様も手に取ってみてください。



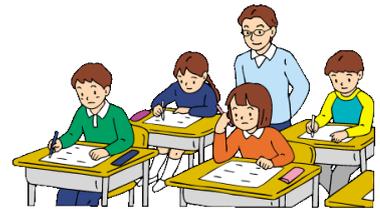
「今年も」と「今年こそは」

3学期の始業式、子どもたちへ「今年も」と「今年こそは」の目標をもってほしいと話しました。

これまでの頑張りや成長でできるようになったこと、自分にとって自信のあること、あるいは周りから評価されたことは、「今年も」と継続することが大切です。同じことを単に続けているだけでなく、継続することで確実なレベルアップが図られ、さらなる自信へとつながることが期待できます。

同様に「今年こそは」の目標をもつことも大切です。誰しも、これまで途中で途絶えた目標や、達成間近で終わってしまった目標などがあるものです。または、目標としてはもったものの、自信がなく挑戦せずにいたものがあったかもしれません。そうした「あと一歩」が必要な目標にも、しっかりと取り組むことで、より良い自分を創ることが期待できます。

ご家庭でも、「今年も」と「今年こそは」の目標を話題にしていただき、この一年の成長を期待していただければと思います。



令和6年度は

今、学校は変革の時です。学習の在り方自体も、「教えてもらう学習」から「自ら学ぶ学習」へと変わってきています。学習用具としてタブレットが導入され、ほぼ毎日のようにタブレットを開く場面が教室にはあります。

学校の在り方としても、これまでの「当たり前」をしっかりと見直し、時代にあった学校へと変わっていかねばなりません。学校評価でいただいた声も、そうした変わりゆく学校の姿に生かしていきたいと考えています。

《校長散歩道 No. 8》

アテネオリンピック、北京オリンピックの平泳ぎで2連覇をした北島康介選手の言葉です。

「自分の限界を自分で決めたくないから、どこまでも頑張り続けられる。」

これは、特別な人の言葉ではなく、私たち皆に共通する言葉であるようです。

とある実験を紹介します。

何も無い壁の前に立った被験者に、「これ以上ないぐらいの力で垂直跳びをする」という課題に取り組んでもらいました。被験者は思いっきり両手を振って、これ以上ない力でジャンプをして壁にタッチします。どの被験者もまさに全力のジャンプです。その被験者に「もう一回しますか？」と聞くと、たいがいの被験者は「これ以上は無理ですね…」と言います。

ところが、壁をタッチしたところにマジックか何かで線を引いて「あの線を越えられませんか？」と新たな課題を与えると、ほとんどの場合がチャレンジするだけでなく、マジックの線を越えてジャンプすることができるそうです。

この実験は、「目標の大切さ」を実感させる実験で、自分で決めた自分の限界点は、目標さえ明確にあれば、越えることは可能であることを教えてくれています。

北島選手も、「目標を達成するための努力とそれを支える明確な目標が必要だ。」と言っています。自分をもう一歩高みへと進めるためには、明確な目標が必要なようです。